



故荒木総長を偲んで

総長の思い出、総長が築かれた「建学の精神」及び産業大学の将来に寄せる期待等を諸先生方に語ってもらいました。

## 飯守重任教授

おられた。昨年十一月京都で、産業大学、金沢工業大学、存在意義を保つ。(私案は園を意味する)を、(保守)がなれば歩進なく革命と破壊があるばかりである。系大学が「扶桑会」に、(ある)成るはこの扶桑会の三大学に就任された、保索系大長の大連合の第一歩である。延長はこの扶桑会の三大学の協力は大きくなりを結ぶことになる。延長にはもう二、三年は、常に大熱心だった。三大学が、(ある)當時もつて思ひ、居たれただきだつたからだ。う。謹んで御真福を祈る。

佐藤吉昭教授  
「大学が将来あるべく一緒に皆んなが検索し、苦しみを共にして十数年の長い道を過ぎた今、余りも突然成長がくくなってしまった。これから、荒木先生がどういう事をされ、それが今日の産業大学の歴史を及ぼしてどれだけの影響を及ぼしてきたか。そして今後も持ち続けるのかという事がようやく決定される段階に入りました。荒木先生、一言で言えば、全くこれまでの、もう一つあります。それは良い意味で、また、差しは大きいが、他大学と比較のしようがない。我々の隣常陸の士

うつてしまっていた。が、しかしそれは全く違う形態で、我が産業大企業は進んでいたと思うのです。政治文化の中央集権化で、こうした産業の歴史はまさに「政黨は最大の武器となり」という激しい闘争的生き方だったと言える。

京都から大阪、という地方都市のしかもして、単なる「地方大学」になり果てるとなく今日、

立のう

に生き方だつたと言える。京都から大阪、という地方都市のしかもして、単なる「地方大学」として加わる立場で、その後、どういうお説をしてくるか、

先生が自ら率先して地元に立派な学校を設立される想いは、した。こんなふうな学術関係者たるに、大阪の経済界くるなんて夢かとも思えたが、失敗談として、當時、阪大について「どうやったのか?」など和洋三十八年か九年でございました。たかねえー、本後学は急成長へと進んでくれないか。では博士過程で、いを受けて、そしんだ。立派な農芸大学の、一人でした。こんな恵まれた機会を、今日に至り、今日までの大なり。そこで、開学前、荒木先生の偉業が、想像される。地元に立派な学校を設立される想いは、した。こんなふうな学術関係者たるに、大阪の経済界くるなんて夢かとも思えたが、失敗談として、當時、阪大について「どうやったのか?」など和洋三十八年か九年でございました。たかねえー、本後学は急成長へと進んでくれないか。では博士過程で、いを受けて、そしんだ。立派な農芸大学の、一人でした。こんな恵まれた機会を、今日に至り、今日までの大なり。そこで、開学前、荒木先生の偉業が、想像される。

たが、後進者としての使命を果すために、必ずやる意気込みを持つべきだ。考え方によっては、それが「おもてなし」であり、「おもてなし」が「おもてなし」としての使命である。つまり、おもてなしは、おもてなしの心を持ったうえで、おもてなしをするべきだ。





國に問題は、ソ連の軍事的脅威というものが、日侮に西側諸国に抱かれてきたる危機的状況です。そういった点から言つても、やはり日本はもう少し経済力のよく計算すれば、そのものも考えゆかなければならぬし、それから、これからは我々の戦略は、それが西側諸国、自由主義的な全般の共戦略という形であつてこないかと有能機能しないんじやないかと思うのです。或る戦後の日本の本は、軍事的にはアメリカの保護におかれ、日本は經濟だけやっていくんだといふ非常に利己主義的な行動をとってきたました。しかし、これがやはりそつともゆかないと思います。とりで、世界で二番目の經濟超大国の局面に入るに至り、その經濟力に対する意識が、その國力に即した責任と対応を成さなければならぬんじゃないかと思うのです。(次号に続く)



22



東国大・関学・京産大・合同合宿、富士風穴にて



東国大・関学・京産大・合同合宿、富士風穴にて



